

『狭衣物語』の構造

——登場人物の配置をめぐる——

平安朝後期の作り物語である『狭衣物語』は、鎌倉時代初期に著わされた物語評論書として名高い『無名草子』において、「狭衣こそ源氏に次ぎてはよう覚え侍れ」と評されているにもかかわらず、現在では、一般に読まれ親しまれることの少ない物語となってしまう。そんな『狭衣物語』とは、一体どういう物語なのであるのか。

『狭衣物語』を読んでいくと、脇役的立場に存する登場人物の言動によって物語が大きく展開されている場面はいくつか出会う。そうした物語を動かしていく登場人物達に視点を合わせていくと、表面上何の関連ももたないように見える彼らの言動は、物語の深部において密接に絡み合っているという事実が浮かび上がってくる。このような登場人物達が、それぞれどのような役割を果たし、そこから物語がどう展開され、更に登場人物同士は互いにどう関わり合っているのか、これらを追求していくことによって、物語の骨格、す

なわち『狭衣物語』の構造を明らかにしていきたいと思う。

一

私は、先に『狭衣物語』は脇役的登場人物の言動により物語が大きく動かされていると述べたのであるが、まずはそんな登場人物のはたらきが顕著に現われている、飛鳥井女君、今姫君、一品宮を中心として語られる三つの物語を取り上げ、登場人物の役割と相互関係について考えていくことにする。

飛鳥井女君物語を動かしていく人物として挙げられるのは、飛鳥井女君の乳母と兄僧（片眼の修行僧）である。飛鳥井女君の乳母は、女君の両親の死後、夫に先立たれながらも女君の世話が続けてきた女性である、といえは聞こえは良いが、実際、この乳母は決して主人である女君に忠実だったとは言いがたく、女君の幸せよりは自分の生活の安定を第一に考えていたといつてよい。こうした乳母の存在

野 中 紀 美

こそが、「狭衣と飛鳥井姫の交渉を圧迫する力として働」き、飛鳥井女君と狭衣を悲恋へと導き、更には女君を入水に追い込んでいく。愚かにも乳母は、飛鳥井女君を失ってしまうことが自分の生活の崩壊に繋がっていくのだということに気付かなかったのである。ここに、乳母を私利私欲に走らせ、女君を入水へと追い詰める最大の原因と、飛鳥井女君物語の悲劇性の根源があるといえるのではないだろうか。そんな乳母に欺かれ海に身を投げようとした女君であったが、彼女はあっさりと入水し、果てたわけではない。女君の兄である片眼の修行僧に運良く助けられ命を拾うのである。この兄僧は、巻二において、源氏宮が斎院に立たれたことを契機に出家を志し粉河寺を訪れた狭衣に出会い、飛鳥井女君の消息を伝えることにより、主人公である狭衣を俗世に呼び戻し、ひいては物語世界の中に繋ぎ止めるという役割を果たしているのである。更にこれ以後兄僧は、「さるべきにや、御弟子にもならまほしく、あはれに思え給を」(二二四頁)、「かく見たてまつり初めぬるも、『仏の導き給にや』と、たのみ聞えて」(二四九頁)というように、狭衣の出家の師として位置付けられ、巻三末尾においては出家の決意を固めた狭衣が、この兄僧を頼って竹生島への出立を思い立つ事実まであることからみても、飛鳥井女君の兄僧が物語を動かす登場人物の一人であることは否めないと思われる。

次に今姫君物語であるが、ここで注目すべきは洞院上の存在である。狭衣の父、堀川大殿の三人の北の方のうちの年長者であり本村である彼女は、太政大臣の女、一条院后宮の妹、春宮の叔母という

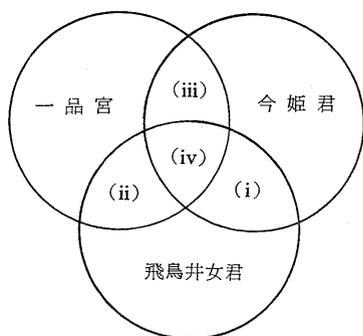
他の北の方を圧倒するほどの恵まれた環境にあった。けれども唯一、堀川大殿との間に子供がいまいということは、洞院上にとって大きな負い目となっていたにちがいない。こうした負い目を克服するために、彼女は「我御有様一つをば花やかに、今めかしうもてなして、『我は』と思したる御心」(六三頁)に走るのであるが、そこに、「人よりは異なる御物好みなどし給て、わらゝかに、人情からぬ」(六三頁)という人間性が絡み合い、彼女の負い目は助長され他の北の方に対するライバル意識に姿を変えていく。洞院上を取り巻く華々しい環境、立場、そして、そこから生じたプライドを守るための対抗意識が、『狭衣物語』の中に、今姫君を登場させる一つの大きな原動力としてはたらいっているのだといえよう。そんな洞院上の要請によって登場した今姫君をヒロインとして語られる今姫君物語において、今姫君の母代の役割を忘れてはならない。彼女はその貴族的教養の欠如を前面に押し出して、今姫君物語に烏滸的な色を添えたばかりでなく、狭衣に対し今姫君と飛鳥井女君が血縁関係にあるという重要な告白をする。そして更に、あの兄僧でさえ伝えることのなかった具体的な飛鳥井女君の消息を狭衣に知らせることによって、常磐尼君という人物の登場を促すことになる。

飛鳥井女君の消息の鍵を握る常磐尼君なる人物を狭衣が尋ねることから、物語は思わぬ方向に進展する。常磐尼君から飛鳥井女君の遺児が一品宮に引きとられたことを知った狭衣が、我が子見たさに一品宮邸に忍び込んだところを、宮に思いを寄せる権大納言に目撃され、あらぬ浮名を流される。こうして狭衣は一品宮との結婚を余

儀無くされ、一品宮物語がその幕を開けることになるのである。

以上、飛鳥井女君物語、今姫君物語、一品宮物語について、そこに登場する脇役的な存在の人物達の言動から彼らの果す役割について考えてみたが、そうした登場人物達の影響を受けて、三物語のヒロインである飛鳥井女君・今姫君・一品宮は、それぞれどのように関連し合っているのだろうか。

〈図表〉



(i) 今姫君母代

飛鳥井女君と今姫君の血縁関係を明らかにする。

(ii) 飛鳥井姫君

飛鳥井女君の遺女。一品宮の養女。

(iii) 洞院上

今姫君の養母。一品宮の母宮（一条院后宮）の妹。

(iv) 常磐尼君

飛鳥井女君・今姫君の伯母。一品宮の母宮（一条院后宮）の女房。

今姫君の母代によって明らかにされたごとく、飛鳥井女君と今姫君は、常磐尼君という二人に共通の伯母をもつ血縁関係にある。

又、常磐尼君の消息により、飛鳥井姫君が一品宮の養女となることが判明し、飛鳥井女君は一品宮とも関わりをもってくることになる。今姫君は、堀川大殿の落胤といわれていたことから、大殿の北の方の一人である洞院上に養女として迎えとられた。この洞院上は一条院の后宮の妹であるから、一品宮にとっては叔母にあたる。そうなると、一品宮と今姫君は、義理の仲というものの、従姉妹同士ということになる。しかも、今姫君の実母は、その姉である常磐尼君とともに、一条院の后宮つまり一品宮の母宮に、女房として出仕していたことから、一品宮と今姫君は、その親の立場からみても、互いに関係をもっていたことができる。こうした飛鳥井女君、今姫君、一品宮の関係をまとめてみると上図のようになる。（図表）参照）

このように、飛鳥井女君、今姫君、一品宮は、常磐尼君を中心に、それぞれに関わりをもっていることがわかった。これらの関連が、飛鳥井女君物語、今姫君物語、一品宮物語にどのような影響を与えているのであろうか。

飛鳥井女君物語は、その大部分が巻一において語られている。しかし、巻二巻末の飛鳥井女君の兄僧の登場を機に、再び物語の中に姿を見せるようになる。そして巻三において、今姫君の母代、常磐尼君によって女君の消息が語られていくことになるが、そのなかで女君の死が確認されると、その焦点は、遺児である飛鳥井姫君へと

移ってゆく。この飛鳥井姫君を狭衣が求めることによって招いた結果が、一品宮との結婚、すなわち一品宮物語の開幕である。このように飛鳥井姫君の存在が、飛鳥井女君物語と一品宮物語を結び付けていくのであるが、これは飛鳥井女君物語にとっては、大きな意味をもってくるものと思われる。

巻一においてその大部分を語り終えていた飛鳥井女君物語は、巻二、巻三と物語が進行するにつれて、次第に過去のものとしての様相を深めてきた。ところが巻三におけるこの飛鳥井姫君の登場により、これから進行されていく一品宮物語と結び付けられることになって、飛鳥井女君物語は、過去から物語の現在へと引き上げられたのである。そして更にそのヒロインを女君から姫君へと移していくことにより、飛鳥井女君物語は、未来へ繋がる物語として存在する可能性をも手中にしているということができ得るであろう。

今姫君物語は、その鳥濟的な内容から、恋愛が中心となる『狭衣物語』の中では、多分に異質な存在として遊離せざるを得ない状態にあった。ところが巻三における今姫君の母代の告白により、それまで互いに筋の交錯を見せることになかった飛鳥井女君物語との関係がうち出され、常磐尼君の登場を促した。その尼君から飛鳥井姫君を経て発生した一品宮物語は、結局今姫君物語とも無関係なものではなかった。今姫君の実母は、その昔一品宮の母である一条院后宮に女房として仕えていたし、今姫君を養女とした洞院上は、一品宮の叔母である。又、後で述べる今姫君の入内計画を打ち壊すことになる宰相中将は洞院上の兄であるから、当然一品宮の身内という

ことになる。こうして今姫君物語は、『狭衣物語』の本筋を行く恋愛物語である飛鳥井女君物語や一品宮物語と結び付けられることによって、物語の流れの中にくみとられていくことになるのである。

飛鳥井女君物語、今姫君物語、一品宮物語は、常磐尼君を中心として、飛鳥井姫君、今姫君母代、洞院上など、彼女達を取り巻く人の存在やその影響関係によって、『狭衣物語』の中でみごとに縫合されていく。この三物語の統合こそ、「彼此連絡し、(中略)前後またよく整頓したり。結構の上に工夫を凝し、変化に富みて、しかも統一の妙ある」とあるように、『狭衣物語』をして緻密な構成といわせる、一つの大きな要素となっているのではないかと思われる。

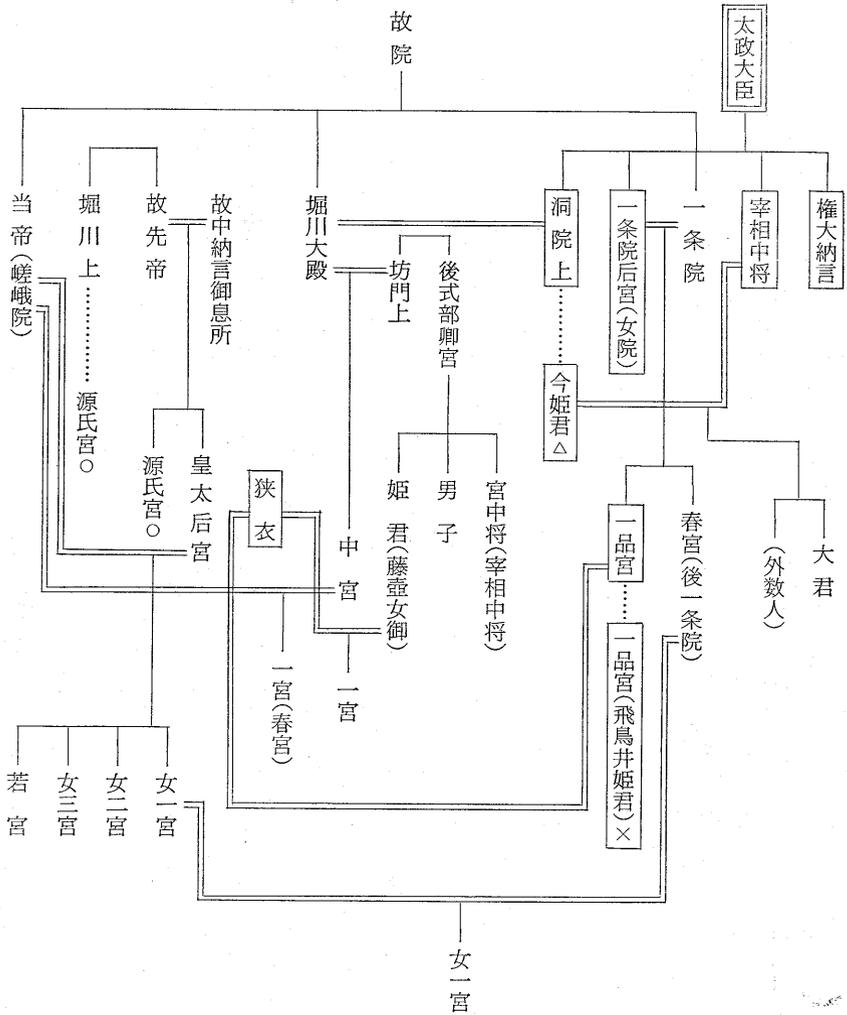
二

前節において明らかにしたように、飛鳥井女君物語、今姫君物語、一品宮物語は、そこに登場するそれぞれの人々が、互に関わり合うことによって『狭衣物語』の中に一つの流れを築きあげているのであるが、それらの登場人物達は、『狭衣物語』全体からみると、どのような位置に存在しているのだろうか。その配置のほどを、系図を利用することによって明らかにしていきたいと思う。

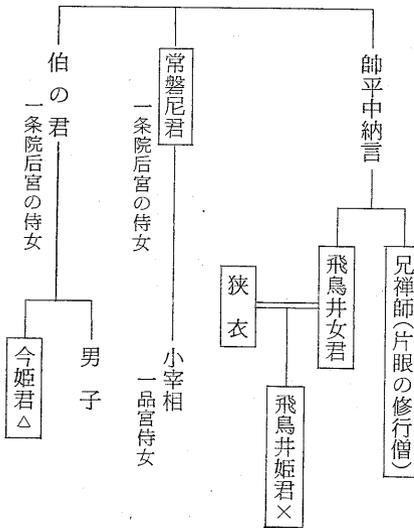
まず、三物語に登場する主要な人物達を整理してみることにする。

〈飛鳥井女君物語〉
飛鳥井女君、乳母、兄僧(片眼の修行僧)、常磐尼君、飛鳥井

〈系図 I〉 『狭衣物語』登場人物関係表



〈系図Ⅱ〉——飛鳥井女君と今姫君の関係——



（注）

- 一、——は親子関係、——は婚姻関係を示す。
養子女となったものは……で示す。
- 二、人物の下に下した○×印は、同一人物であることを示す。

姫君、狭衣。

〈今姫君物語〉

今姫君、母代、洞院上、宰相中將、常磐尼君。

〈一品宮物語〉

一品宮、権大納言、飛鳥井姫君、常磐尼君、一条院后宮、狭衣。

これらの登場人物を系図にみてみる（〈系図Ⅰ・Ⅱ〉参照）と、飛鳥井女君物語、今姫君物語、一品宮物語における登場人物達が、系図の右部に集中していることは誰の目にも明らかである。『狭衣物語』の系図の右側を占めているのは太政大臣家の系譜であるから、彼ら三物語の登場人物達は、そのほとんどが太政大臣家又はそれに関わりをもっていることになる。

こうしてクローズアップされた太政大臣家は、『狭衣物語』において、「代々の御おぼえ、うちうちの御有様も、花やかにいとめでたし」（三三頁）というように、一条院・後一条院の後権として、物語における政治的世界の中心に位置している家系であるといえる。けれども、『狭衣物語』がその四巻を語り終えた時、この太政大臣家は、政治の表舞台、つまり皇位継承という方面から、どうやら姿を消しつつあるという現象がうかがえる。ここでは、そうした太政大臣家の後退の過程を追求し、考察を加えていきたいと思ふ。

太政大臣は、その娘を一条院へ入内させたところ幸運にも一の宮を生み、その皇子も春宮に立ち、このまま太政大臣家の行末は安泰

であるかのように思われた。けれども、この春宮すなわち後一条院は、その皇位を継承すべき皇子を、最後まで得ることができなかったのである。後一条院には宣耀殿女御をはじめとする多くの女御・更衣がいたが、その間に御子の誕生をみることはできなかった。

又、物語冒頭からその入内を前提として語られていた源氏宮との関係も、父一条院の突然の崩御を契機に、賀茂の神託で源氏宮が齋院に立つことよって沙汰止みという憂目をみることから、折角の皇子誕生の可能性を有した機会を逃してしまふことになる。その上、最後の希望の綱とでもいうべき女一宮の入内も、女宮の誕生により水泡に帰す結果となった。こうして、後一条院は皇子獲得の本意を叶えることができなかったために、その御子が今後帝位に即く可能性を絶たれてしまふことになり、それは後一条院の系統の断絶を如実に物語るものである。この後一条院の系統の断絶はその父である一条院系統の断絶に等しく、さすればこの断絶は、一条院・後一条院の後楯として存在することでその政治的権力を確立していた太政大臣家にとつても、直接大きな打撃となつて繋がっていくという事実は何めまい。ここに、太政大臣家の栄華の支柱が脆くも崩れ去るうとしてるのである。物語冒頭で窺われた、あの華々しいまでの栄耀が、物語も終盤においてその影を潜めていくという太政大臣家後退の根源は、一条院・後一条院の系統における皇位継承権の喪失にあるといえるのではないだろうか。

次に、今姫君の入内について、太政大臣家の問題としてこれを考えてみたいと思う。太政大臣の女である洞院上は堀川大殿の許へ嫁

いだが、子供に恵まれないこともあってその落胤と噂されていた今姫君を養女にした。この今姫君を、洞院上は他の北の方に対するライバル意識から、後一条院へ入内させようと企てるのであるが、今姫君の存在を認めない堀川大殿がこの計画を心よく思う道理はなく今姫君の入内は太政大臣家をバツクに遂行されることになった。もし、この入内が成立し今姫君が後一条院の皇子を生むようなことにもなれば、それは後一条院にとつても、又その後楯である太政大臣家にとつても、以後の栄華を掃るぎのないものとして手中におさめる土台となつたにちがいない。けれども今姫君の入内は不沙汰に終わる。しかも、その入内を不沙汰にした張本人が他ならぬ太政大臣家の人物、宰相中将であったことはおいそれと見逃すことはできない。今姫君の入内が不沙汰に終ることを最も切に願っていたのは、堀川大殿や狭衣を有する堀川家である。その堀川家の人物が直接手を下して入内を不沙汰へと導いたわけではなく、この入内が成功すれば最も大きなメリットを得るはずであった太政大臣家が、その身内である宰相中将をして自らの栄華への可能性を潰してしまつていくという事実は、太政大臣家の失態を語るには十分すぎるものではあるまいか。更に、この入内は、後一条院の後継者を生む可能性を秘めていたものであっただけに、沙汰止みとなつてしまつたことで太政大臣家が失つたものは意外に大きく、後の皇位継承権の喪失にも繋がるようなダメージを負わされていたのではないかと思う。しかしながら、こうした太政大臣家にとつてはまさに悲劇としか言えないような出来事が、我々の目にはどう見ても喜劇・烏話話

としてしか映らないのはどうしてなのだろうか。それは、そこに登場する人物自体のもつ烏滸性が物語に反映しているからだと思われる。洞院上や宰相中将の人物造型をはじめとして、今姫君・母代を中心に側に仕える女房達の無教養さが巻き起こす数々の滑稽、反みやび的な出来事が、この今姫君の入内不沙汰事件を烏滸話として成り立たせているのだといえよう。

太政大臣家の失態を表わすものとして、もう一つ忘れてはならない事件は、狭衣と一品宮との結婚である。この一品宮の降嫁事件の主犯である権大納言も又、太政大臣家の一員であった。一品宮に思いを寄せていた権大納言は、一品宮邸から出て来た狭衣を見つけて邪推嫉妬し、二人の浮名を流して狭衣と一品宮の結婚を決定づけるのである。こうした権大納言の自分本位の軽率な行動は、またしても太政大臣家の身内の恥を曝す結果を招いている。このことから、一品宮の降嫁事件は、太政大臣家の烏滸性を象徴する重要な要素となっているのだといえる。

こうして、今姫君の入内不沙汰事件と一品宮降嫁事件をみていくことにより、太政大臣家は、洞院上・宰相中将・権大納言を中心として『狭衣物語』において烏滸的存在として位置づけられている登場人物のすべてを有しているといっても過言ではない状況にあることが明らかにされてきたと思われる。ここに太政大臣家の烏滸と反みやびのルーツを見出すことができるのである。そんな太政大臣家の烏滸と反みやびを象徴する失態は、その原因が常に太政大臣の内部に求められるということから、太政大臣家は、「家の内側から崩

れている」^(注3)という状態に陥っていることが判明するのである。今姫君事件、一品宮事件を契機として、その内部から崩れ始めた太政大臣家は、一条院・後一条院の系統の断絶により皇位継承権の喪失という決定的なダメージを受け、『狭衣物語』の政治的世界から後退していくことになる。こうした太政大臣家の自滅が、とりもなおさず堀川家の繁栄をゆるぎのないものとし保障していくという皮肉な結果に繋がっているということは、『狭衣物語』の構造を考えていく上で見逃すことのできない事実なのである。

三

『狭衣物語』をもう一度登場人物の言動とその影響という点から見つめ直してみた時、俄に頭角を現わしてくる人物がいる。それは、出雲乳母、その人である。女二宮の乳母である彼女は、狭衣との密通事件によって発生した女二宮の妊娠を、その「心かしこき人」(一五二頁)の本領を發揮して、女二宮の母大宮の懐胎と装ったのである。この出雲乳母の一計により、狭衣と女二宮の間に生まれた若宮は、嵯峨院の御子として位置付けられることになったのである。こうして狭衣は、若宮を他人の子としてみなげなければならない口惜しさを随所で味わうこととなり、後に嵯峨院より後見役を依頼され生活を共にするようになっても、親子の名告りをあげられぬことのもどかしさは、当然狭衣の中に生じたものと思われる。ここに、狭衣が女二宮を不幸に陥れた罪に対する一つの返報をみることができるとはならないだろうか。もし、狭衣が女二宮との関係を公に

してれば、彼女の降嫁は実現し、大宮の死や女二宮の出家はもちろんのこと、若宮を他人の子としてみるようなことにはならなかつたはずである。このことから、若宮が帝の御子という立場におかれている現実とは、狭衣の過失、つまり女二宮への罪の存在を証明し、かつ、狭衣そして女二宮の中に過去の出来事を彷彿させる契機となるものだといえよう。

ところが、若宮が狭衣の子ではなく、他ならぬ帝の御子として存在していることには、もう一つの重要な役割があるのである。物語も巻四の後半になり狭衣は帝位に即くことになる。この思いもかけない狭衣即位を決定づけたのは、天照神の神託であった。その神託の中に、「若宮は、その御次々にて、行末をこそ。親をただ人にて、帝に居給はんことはあるまじきことなり」（四三五頁）とある。

若宮がその事実通り狭衣の子として存在していたならば、彼が立坊の対象となり得るはずはないといえる。若宮が嵯峨院の御子であったからこそ、立坊は可能なことなのである。そして、この若宮立坊の噂が流れたことにより、天照神の神託が有効に生かされて、全く意外なこととされた狭衣の即位も、少なからずその必然性を帯びてくることにもなるのであろう。このように若宮が嵯峨院の御子として位置づけられたことは、『狭衣物語』の展開に大きな影響を与えているといえよう。そうなると、この若宮を帝の御子となるように謀った、あの出雲乳母の処置こそが、『狭衣物語』を動かしていく一つの契機となっているのではないかと思われる。その当初においては急場をしのぐためだけの策と見えた出雲乳母の一計が隠しもつ

ていた意味は大きく、出雲乳母は、『狭衣物語』において重要な役割を与えられた登場人物の一人であるということができるのでないだろうか。

嵯峨院には、若宮のほかにもう一人、中宮との間に皇子がであった。この一の宮は、嵯峨院が讓位した際に立坊し春宮となるのであるが、そのような立場にいながら、彼は終始監視される存在に終わっている。嵯峨院の一の宮が立坊したのは物語第三年目のことであり、その時即衣した後一条院が讓位することになれば次に帝位に即くのは春宮である一の宮ということになるのだろう。しかし、物語第八年目において、現実の後一條院から讓位された帝位に即いたのは狭衣であり、しかもその際に人々の注目を集めたのは嵯峨院の若宮の立坊であって、この春宮の存在は全く表面に出ることはなかった。更に、狭衣が帝位に即いたその後も、皇位継承に関することは若宮や狭衣帝の一の宮（藤原腹）の立坊の件ばかりであり、そうした場に春宮が顔をのぞかせることもないのである。このように皇位継承に関わり合いをもたない春宮、つまり嵯峨院の一の宮は、物語においてどのような役割を果たしているのだろうか。

一の宮の母中宮は、堀川大殿と坊門上との間に生まれた姫君である。彼女が嵯峨院に入内し中宮となり更には一の宮をも生んだということは、その母である坊門上はもちろんのこと、父の堀川大殿にも、「行末まで頼もしき御有様」（三三二頁）を約束することになる。そして、嵯峨院の讓位にともない一の宮の立坊が現実化したことは、堀川家に「めでたういみじかりけり」（一八九頁）という状況を

もたらしているのである。堀川大殿の系譜にとつて、一の宮のような坊がねを有し、その立場が実現するということは、皇位継承の権利を獲得したことに繋がり、一つの家系が榮華を掌握するための必要十分条件となる。つまり、この嵯峨院の一の宮は、堀川大殿の系譜に威勢を加え、後に政權を手中におさめ榮華を極める堀川家繁栄の行末を暗示し、又、その足場を固めていくという役割を、春宮という位置に据えられることによって果たしているのである。

そうした一の宮は、堀川大殿の系譜の人物であると同時に嵯峨院の系譜にも属している。今度はこの嵯峨院の系譜から一の宮の存在を見ていきたいと思う。嵯峨院は、皇位を継承していくべき皇子に恵まれず、やむなく皇位継承権を喪失することになった一条院・後一条院の系統とは対照的に、一の宮として晩年には若宮をと二人皇子を手に入れて、讓位の際も、「一の皇子のおはしませば、飽かぬことなき御有様」(二八六頁)で、一の宮もすんなり春宮に立ち、この先も嵯峨院の系譜が間違ひなく皇位を継承していくように思われた。けれども、実際に後一条院が讓位したその帝位に即いたのは、春宮となっていた一の宮ではなく狭衣であった。一の宮は春宮という立場にいながら、「ただ人」である狭衣に帝位をあげ渡すという結果に甘んじることとなるのである。更にそれ以後、皇位継承の場で頭角を現わしているのは狭衣帝の一の宮であり、現在春宮という立場にいる嵯峨院の一の宮の存在などは、無きに等しい扱いを受けている。もしも世間の噂通りに、狭衣帝の一の宮の立場が叶えば、かつてより立場の呼び声の高かった嵯峨院の若宮も皇位継承の

権利を失うことになってしまふ。当帝の座は狭衣に、次期春宮も狭衣帝の一の宮にという堀川大殿の系譜の限りなき繁栄の様を横目に、嵯峨院の系譜は、二人の皇子を擁していたにもかかわらず、皇位継承の権利を獲得することができず、その場から影を潜めていくということになるのである。

ところで、この嵯峨院の一の宮に関するエピソードとしては、一の宮が春宮となってからのものが二つある。一つは宰相中将の妹君をめぐって春宮と狭衣が火花を散らすことであるが、結局春宮の思は叶えられず、宰相中将の妹君は狭衣と結ばれる。更に彼女は一の宮を生み、入内後は藤壺女御として中宮へと、繁栄する様を見せつけられるという憂目を見る。今一つは一品宮(飛鳥井姫君)に関することである。春宮は、以前から思いを懸けていた一品宮の入内を狭衣帝に懇願するが、今は亡き一品宮のことを思いやる狭衣は、「すがすがと、おぼしたつべき様にもあらざりけり」(四五五頁)と、春宮の願いを受け入れようとはしないのである。これら二つのエピソードは、狭衣が春宮の優位に立っていることを見せつけるような結果を招くことになっている。狭衣は物語の主人公であるから、二人の間にこうした差が生じるのはやむを得まいが、嵯峨院の一の宮は、仮にも春宮という立場にありながら、このような歴然とした劣勢の状況に甘んじているのである。こうした狭衣と嵯峨院の一の宮との関係は、それがそのまま堀川家と嵯峨院の家系という「家」同志の優劣、繁栄と衰退とを象徴しているかのように思われる。

嵯峨院の一の宮は、堀川大殿の系譜と嵯峨院の系譜、その両方に属しながら、堀川家には繁栄のきざしを与えその栄華の一要素としてかじづき、一方嵯峨院の系譜においては、その皇位の継承権の喪失を暗示しその系統を継絶へ追いやる方向へ導いていっているかのように、その衰退を象徴する役割を果たしている。結局のところ、嵯峨院の一の宮は、嵯峨院の系譜を自滅の方向へ誘導していくことによって、堀川家の繁栄をゆるぎのないもの、つまり他からの妨害を受けることのない完全な栄華とするための一種の裏付け的存在として、『狭衣物語』の中にかく位置づけられているのだと思われる。

四

『狭衣物語』を政治的な次元において考えてみた場合、その中心となるべき天皇を有している家系としては、太政大臣（一条院・後一条院）の系譜、嵯峨院の系譜、そして堀川大殿の系譜という三つのものがあげられる。政治的世界においては、やはり皇室と直接に関係をもつこと、つまり皇位継承の権利を有している「家」こそがその中核に位置し栄華を掌握することができるのである。そうすると、太政大臣（一条院・後一条院）の系譜、嵯峨院の系譜、堀川大殿の系譜の三つのうち、『狭衣物語』の中で最終的にその栄華をほしのままにすることができるのは、物語も巻四に入り狭衣が即位することによって、物語中、最後に帝位を獲得し、しかも今上（狭衣帝）の一の宮という坊がねをも有している堀川大殿の系譜であるという

ことなるう。

狭衣が帝位に即くことは、『無名草子』が「何事よりも何事よりも、大将の帝になられたる事、返す返す見苦しくあさましき事なり」と批難しているように、普通ではあるはずもない不自然不合理などんでもないこととして受けとられ、それが『狭衣物語』の評価を貶める最大の原因となっているのである。けれども、『狭衣物語』を、完成された一つの物語としてとらえる時、自ずとこの「さらでもありぬべき事」といわれた狭衣即位の必然性が浮かび上がってくるのである。

深沢徹氏は、『無名草子』の批難する『狭衣物語』における伝奇的要素にその視点をおかれ、『狭衣物語』の構造について論じておられるが、氏はその論文、「往還の構図もしくは『狭衣物語』の論理構造―陰面としての『無名草子』論―」の中で、狭衣が「異界」を志向することで両親に与えてきた「不孝」を、狭衣自身が帝位に即くことによって、太上天皇、皇太后宮という位を彼らに与え「孝養」を成し遂げているところに狭衣即位の必然性をみておられる。^(註4)

こうした考え方は、井上真弓氏の、『狭衣物語』を狭衣と堀川大殿父子の親子の物語としてとらえ、「孝―不孝の構図」からなされた^(註5)判断と相通じるものがあると思われる。この深沢・井上両氏のような考え方に賛成できないわけではないのであるが、私は、狭衣を帝位へと導いているのは『無名草子』が批難する伝奇的要素や両親への孝養だけではないと思うのである。それら以前のこととして、物語の内部で、狭衣の即位を成り立たせるに必要十分な状況を設定す

べく造型されかつ有効に動かされている登場人物達の存在を忘れてはならないのではないだろうか。こうした観点から、私自身は、狭衣即位の必然性を、彼を取り巻く登場人物達の役割とその配置との関係の中に見出したいと思うのである。

その場面の女主人公が、脇役的存在の登場人物により何らかの形で影響を受けるという共通点をもつ飛鳥井女君物語・今姫君物語・一品宮物語は、その相互関係が物語の表面に顕著には現われていないとも、常磐尼君を中心として、そこに登場する人物達の関連により物語内部において縫合されていく。こうして物語展開の一つのラインが形成され『狭衣物語』の興行きを深めているということは、すでに述べた通りである。この相互に関連し合う三つの物語は、そのヒロイン達がそれぞれに不幸な目に遭うという共通項もまた所有しているのであるが、そんな彼女達の不幸が、すべて太政大臣家にその影を落としている事実は見逃すことができない。系図の上にもその旨がはっきりと現われていた(系図Ⅰ・Ⅱ参照)ように、飛鳥井女君物語・今姫君物語・一品宮物語に登場する人物達は、主人公である狭衣以外、そのほとんどが太政大臣家に関与するものとみなされるのである。

今姫君の入内不沙汰を招来した洞院上と宰相中将、そして一品宮降嫁の契機となった権大納言は、皆、同じ太政大臣を父とする兄妹である。これら太政大臣家を代表する彼ら三人は、いずれも根本的に悪人であるとはいいがたい。けれども、太政大臣である父の権力の傘の下で助長されたおごりから生じた彼らの非常識さと軽率な行

動が招いた失態は、そのまま太政大臣家の烏滸性を定義付けているといえよう。そんな彼らを引き立て、そのはたらきを活性化させているものが、今姫君をはじめ母代、そしてお付きの女房達の存在である。彼女達の為人と言動は、太政大臣家の烏滸と反みやびを確固たるものとしているのである。この太政大臣家は、一条院・後一条院の後楯として、春宮である嵯峨院の一の宮を擁する堀川家とともに、物語当初から『狭衣物語』の政治的世界の中心に位置していた。しかし、今姫君の入内不沙汰や一品宮降嫁事件に代表される、太政大臣家が内包する烏滸と反みやびによって、「家」の内側から崩れていくことになる。更に、その勢力の支柱であった一条院・後一条院の系譜に皇位を継承していくべき皇子が誕生しなかったことが致命傷となり、狭衣という堀川家の人物に皇位の座を譲り渡してしまった今、太政大臣家並びに一条院・後一条院の系統に関わる人物が、再び帝位に即く可能性はもはや無に等しい状態にあるといっても過言ではない。こうした一条院・後一条院の系譜を含む太政大臣家の自滅は、結果的にライバルといえる堀川家に栄華を送り込みその繁栄を保障していくこととなり、堀川家の栄耀を確立し象徴している狭衣の即位を必然的なものとする役割を果しているのである。

後嗣の皇子に恵まれなかったことにより、その系統が絶え、皇位継承の権利を喪失することになった一条院・後一条院の系譜とは対照的に、嵯峨院の系譜は、二人の皇子を有し、しかも一の宮は春宮という立場にあり若宮にも立坊の噂が立つなど、皇位を継承していく

には十分な条件を兼ね備えていたにもかかわらず、一条院・後一条院の系統と同様に、嵯峨院の系譜もまた、皇位継承の主流から外れていくことになる。嵯峨院の一の宮は、早くから立坊していながら、不覚にも狭衣に先を越されてしまい、とうとう最後まで帝位に即くことなく終わっている。こうした彼の存在は、あたかも堀川家の繁栄を象徴し裏付けるがため、そして嵯峨院の系譜の衰退を見せつけるがためのようなものとなっている。更に、もう一人の皇子である若宮は、実際には狭衣と女二宮との間に生まれた子でありながら、出雲乳母のはたらしきによって嵯峨院の御子として位置付けられたことから立坊の噂がのぼるなど、一見、こうした彼の存在は嵯峨院の系譜を繁栄させていくものであるかのように見えた。ところが、その立坊は、全く予想外であった狭衣を帝位に即けさせる天照神の神託にうまく生かされ、狭衣の即位を必然化させるようにはたらし、それを機にして狭衣帝の一の宮に立坊の噂が取り沙汰されるなどして、この若宮の次期春宮という立場がおびやかされることとなり、嵯峨院の系統も、皇位継承の権利を喪失する方向へ流されていくのである。

こうして、天皇を擁し、『狭衣物語』の政治的世界の中心となっていた三つの家系のうち、太政大臣（一条院・後一条院）そして嵯峨院と、二つの系統が政治の表舞台である皇位継承の場面から自滅というかたちをとりながら次々と姿を消していくことにより、当然のごとく一手に脚光を浴びることになったのは、他でもない堀川大殷の系譜であった。

堀川大殷は、一条院・嵯峨院と同様に故院の皇子でありながら、「何の罪にか、ただ人になり給ひにければ」（三一頁）と、どうしたことか皇位継承から外れてしまっていた。けれども、『狭衣物語』がそのすべてを語り終えてみると、堀川大殷は、息子狭衣が帝位に即くことにより太上天皇の待遇を受けることになる。すなわち堀川家は、大殷が「ただ人」となったことから一度は手離したはずの皇位継承の権利を、狭衣即位を手掛かりとして奪回したことになるといえよう。しかし、ここで大切にしなければならぬことは、この帝位を、堀川家が狂望するが故に作意をはりめぐらせ、ライバルを圧倒し奪取したものでは決してない、ということである。それは他の勢力を有していた、太政大臣・一条院・後一条院・嵯峨院の系統が自滅していくことにより、自然に堀川家の掌中に転がり込んできたものなのである。飛鳥井女君物語・今姫君物語・一品官物語が形成する一つのラインが太政大臣家へと流れ込み、その烏滸と反みやびを露見させ、そこに一条院、後一条院系統の断絶という致命的な打撃を与えて、太政大臣家を自滅へと追いやっていく。嵯峨院の系統も、二人の皇子、一の宮・若宮の存在により、結果的には堀川家の繁栄にかしづく立場に甘んじることになる。こうして、狭衣及び堀川大殷をめぐる登場人物のすべてが、堀川家を榮華へと導き、それを保障する方向に動き、その繁栄を必然化させているかのよう描かれている。『無名草子』においてきびしく批難されている狭衣の即位も、こうした周囲の状況によって要請されたものであるとも考えられ、とりもなおさず、それは堀川家繁栄の象徴であり、榮華

の確立を意味するものであるといえよう。

源氏宮との叶えられない恋をベースに展開される飛鳥井女君や女二宮との悲恋物語と、太政大臣家をはじめとした一条院・後一条院そして嵯峨院の系譜の自滅から浮かびあがる堀川家の繁栄の構図という二つの要素によって、『狭衣物語』は成り立っているとと思われる。けれどもこれは、例えば『源氏物語』のように、藤壺との密通事件が光源氏を太上天皇位に導くという恋の成就が栄華を支えている物語の構造とは多分に趣を異にしている。『狭衣物語』では、狭衣が求める源氏宮との恋は、永遠に叶えられないものとして設定され、そこから派生した女二宮との恋も、源氏宮の存在ゆえに密通事件となってしまう。それによって若宮が嵯峨院の御子として位置付けられ、狭衣の即位という栄華に繋がっているのではあるが、この女二宮との密通事件は、狭衣の恋の成就ではなかったのである。更に、『源氏物語』では実子である冷泉院が帝位に即くことにより光源氏に太上天皇位が与えられるが、これが『狭衣物語』では不義の子若宮が嵯峨院の御子となり、その立場の噂を神託に反映させて狭衣自身が帝位に即くことにより、父堀川大殿に太上天皇の栄位を与える、結果となっている。このように、『狭衣物語』では、『源氏物語』ほど顕著に、恋愛が主人公の栄華を支えてはいないのである。むしろ、狭衣は帝位というこの世の栄華を極めてもお、満たされぬまま憂愁の世界をさまよひ続けているのであり、『狭衣物語』においては、栄華が恋を満たしてはくれないのである。表面を彩る恋愛物語というペールを取り去ると、そこには、登場人物の役割とそ

の配置によって必然性が与えられた狭衣の即位に象徴される堀川家の繁栄の構図が潜んでおり、この「家」の構図が、狭衣の栄華を裏から支え帝位へと導いていくのである。

こうした〈恋愛〉と〈栄華〉との関係が、『狭衣物語』自体を複雑なものとしているのではないかと思う。源氏宮の存在を軸として描かれる恋愛物語と狭衣即位で象徴される栄華との関連は、物語の表面をなでるだけではわからない。その内部に秘められたものであり、この一見無関係を装っている両者の関係が、登場人物の役割と配置との関連を追求していくことにより浮かびあがる堀川家の繁栄の構図の中から見つけ出されたものであるということを経視してはならない。恋愛物語の奥に潜む、登場人物の役割と配置によって裏から支えられ必然性を帯びることとなった堀川家繁栄の構図を読みとることは、何よりも『狭衣物語』を理解していくための重要な視点であるとともに、『狭衣物語』の骨格、つまり構造を一つ明らかにし得たといえるのではないだろうか。

注

- 1 森岡常夫『平安朝物語の研究 増補版』（昭和四十二年十月三十一日、風間書房刊）所収の『狭衣物語の研究』、三三九頁。
- 2 藤岡作太郎『国文学全史—平安朝篇—』（明治三十八年十月一日、東京開成館刊）、五二八頁。
- 3 「物語研究」（第二号、昭和五十五年五月十日、編集同人・物語研究）掲載の平井仁子『狭衣物語』試論、二〇頁。
- 4 「文芸と批評」（第五卷第四号、昭和五十五年五月 文芸と批評の会編）掲載の深沢徹「往還の構図もしくは『狭衣物語』の論理構造

(下)―陰画としての『無名草子』論―、六頁参照。

- 5 「日本文学」(第十卷第三十一号、一九八二年十月十日、日本文学協会編集・刊行)掲載の井上真弓「『狭衣物語』の構造私論―親子の物語より―」、六一頁参照。

(付記)

- 1 本論文を作成にあたって、定本を、三谷栄一・関根慶子校注『狭衣物語』(日本古典文学大系)(昭和四十年八月六日、岩波書店刊)としました。本論文中の引用文はすべてこれに依りました。
- 2 本論は、昭和五十九年度卒業論文〈『狭衣物語』の構造―登場人物の配置をめぐって―〉をまとめたものであります。